平成30年度Joint Education Program（ウズベキスタン・スタディツアー）報告

所属機関　東京外国語大学世界言語社会教育センター
職・氏名　特任講師・木村暁

１．実施場所　　ウズベキスタン共和国サマルカンド市（サマルカンド経済サービス大学ほか）、ブハラ市（ブハラ国立建築・芸術保護区博物館管区）、タシュケント（タシュケント国立東洋学大学、日本人墓地ほか）

２．実施形態　　各大学での学生交流（課題にしたがったグループワークとプレゼンテーションなど）、歴史文化遺産見学、民家での現地文化体験（調理実習など）

３．実施日程　　2019年3月13日～2019年3月23日

４．実施内容

本学中央アジア専攻の教員2名（島田志津夫、木村暁）の引率のもと、23名の学生が現地研修と学生交流を目的としてウズベキスタン・スタディツアーを実施した。参加学生の専攻別内訳は中央アジア専攻生13名と他専攻生10名、また、学年別内訳は1年生20名、2年生2名、3年生1名であった。本学での事前学習（2019年1月24日および3月8日に実施）においてウズベキスタンについてのある程度の予備知識を得るとともに、現地において取り組むべき課題をグループ（8つのグループを編成）および個人ごとに設定したうえでスタディツアーに臨んだ。

一行は3月13日晩に首都タシュケントに到着後、翌朝サマルカンドに列車で移動して本格的な活動を開始した。サマルカンドでは14日にサマルカンド経済サービス大学にて同学およびサマルカンド外国語大学の学生たちと学生交流をおこなうとともに、彼らの同伴を得て市内の歴史文化遺産（グーリ・アミール廟、レギスタン広場など）を見学して回った。学生交流では本学とサマルカンド側の学生2～3名ずつが、たがいの国の文化や慣習を紹介するプレゼンテーション（英語またはウズベク語（日本語通訳付き））をおこない、その後、双方の学生たちが入りまじって自己紹介と密な意見交換が繰り広げられた。翌15日も、世界的に有名なウルグベク天文台や内外の参詣者、観光客が集うシャーヒ・ズィンダ墓廟群などを見学したのち、郊外の民家を訪問し、民族料理の調理実習、春分祭（ナウルーズ）にまつわる伝統行事体験、民族衣装着装などの実習の機会をもった。

翌朝移動した先のブハラでは16～18日に、ブハラ国立建築・芸術保護区博物館管区内の歴史文化遺産の数々を見学し、とくに17日には学生が各自の目的とテーマにしたがって自主的な現地調査に取り組んだ。ブハラからは18日晩に列車でタシュケントに移動した。

19～22日にはタシュケント国立東洋学大学日本語講座の学生たちと学生交流をおこなった。19日の交流会では東洋学大学の学生たちが自国やその文化について紹介するプレゼンテーションをおこない、その後、本学側の8グループそれぞれに先方の学生3、4名ずつが加わるかたちで混成グループが結成され、あらかじめ設定されていたテーマ（料理、工芸、服飾、バザール、経済、伝統行事、言語、対日本関係）にしたがってグループごとに調査の実施計画が相談、決定された。同日には第二次大戦後に抑留された日本兵の墓地と資料館の見学もおこなった。20～21日に各グループの学生はタシュケント市内各所でグループワークを実施し、最終日22日に東洋学大学で開催された報告会では、8つのグループがそれぞれのテーマに関する調査結果を報告するプレゼンテーションをおこない、これに引率教員と先方教員が加わるかたちで活発な質疑応答と議論がおこなわれた。その後、夕食をまじえた懇談会をもって学生交流を終了し、一行は帰国の途についた。

５．成果（アンケートがある場合はその内容も含めて）

ウズベキスタン訪問は本学の参加学生23名全員にとってはじめての機会であり、当初何人かの学生たちには不安や戸惑いの表情もみてとれたが、サマルカンドの経済サービス大学と外国語大学、またタシュ

ケント国立東洋学大学側のサポートにも支えられながら、各学生は短期間のうちに現地への適応をみごとに達成した。現地の生活、風俗、文化にじかにふれるとともに、とりわけ現地学生との交流のなかで彼らのものの見方、考え方、あるいは心性を感じとり、さらには、ウズベキスタンの社会や経済がどのようなしくみで動いているのか、また、社会関係、人間関係がどのようなコードや規範のもとで取りもたれているのかへの理解を着実に深めたといえる。そのことは東洋学大学での3月22日の報告会でなされた各報告からよく確認することができた。

ウズベキスタンでは国家語であるウズベク語とソ連時代以来のロシア語が広く通用しているが、本学学生は学年やカリキュラムの関係もあり、両言語で現地学生と自由に意思疎通をとることはできず、もっぱら日本語か英語で会話をおこなっていた。しかし多くの学生がそこにもどかしさを感じていたのも事実であり、中央アジア専攻やロシア専攻、またこのスタディツアーを機にウズベキスタンへの関心を深めた他専攻の学生の一部でも、ウズベク語あるいはロシア語への学習意欲が高まったようにみえる。総じて、生きた言語としての現地語を学ぶことでコミュニケーションの円滑化のみならず現地社会への理解の深化が達成できるはずだとの実感を学生が得たことは、学生交流を通じてこその貴重な成果である。本学学生はサマルカンド外国語大学やタシュケント国立東洋学大学の学生たちの日本語能力の高さに圧倒されていた感もあり、それは今後の彼らの外国語学習を力強く動機づけるにちがいない。参加学生にはこの経験を財産として研鑽に励むことを期待できる。

サマルカンド経済サービス大学にて学生交流

サマルカンドの民家にて（新春の風物詩スマラクづくり）

ブハラのサーマーン朝王家廟（通称イスマーイール・サーマーニー廟）にて

タシュケントの日本人墓地にて

タシュケント国立東洋学大学にて最終報告会

タシュケント国立東洋学大学にて